

# 宮津市由良の文人たち

## ■ 曾禰好忠（そねのよしただ）



由良のとをわたる舟人かぢをたえ  
行方も知らぬ恋のみちかな

（小倉百人一首、藤原定家、1162-1241）

## ■ 加茂季鷹（かものすえたか、-1841）

江戸後期の国学者。京都生。和歌を有栖川宮職仁親王に学ぶ。江戸では加藤千蔭・村田春海ら歌人・文人と交わり、京に帰って上賀茂の祠官となる。狂歌を得意とし、居を雲錦亭と名づけ歌仙堂を設け、また文庫に数千巻の書を蔵した。

## ■ 森 鷗外（もりおうがい、1862-1922）

『山椒大夫』（1915）



「昔陸奥に磐城判官正氏と云ふ人があつた。永保元年の冬罪があつて筑紫安楽寺へ流された。妻は二人の子を連れて、岩代の信夫郡にあつた。二人の子は姉をあんじゆと云ひ、弟をつし王と云ふ。母は二人の育つのを待つて、父を尋ねに旅立つた。越後の直江の浦に来て、応化の橋の下に寝てみると、そこへ山岡大夫と云ふ人買が来て、だまして舟に載せた。母子三人に、うば竹と云ふ老女が附いてあつたのである。さて沖に漕ぎ出して、山岡大夫は母子主従を二人の船頭に分けて売つた。一人は佐渡の二郎で母とうば竹とを買つて佐渡へ行く。一人は宮崎の三郎で、あんじゆとつし王とを買つて丹後の由良へ行く。佐渡へ渡つた母は、舟で入水したうば竹に離れて、栗の鳥を逐はせられる。由良に着いたあんじゆ、つし王は山椒大夫と云ふものに買はれて、姉は汐を汲ませられ、弟は柴を芻らせられる。子供等は親を慕つて逃げようとして、額に烙印をせられる。姉が弟を逃がして、跡に残つて責め殺される。弟は中山国分寺の僧に救はれて、京都に往く。清水寺で、つし王は梅津院と云ふ貴人に逢ふ。梅津院は七十を越して子がないので、子を授けて貰ひたさに参籠したのである。つし王は梅津院の養子にせられて、陸奥守兼丹後守になる。つし王は佐渡へ渡つて母を連れ戻し、丹後に入つて山椒大夫を竹の鋸で挽き殺させる。山椒大夫には太郎、二郎、三郎の三人の子があつた。兄二人はつし王をいたはつたので助命せられ、末の三郎は父と共に虐けたので殺される。これがわたくしの知つてゐる伝説の筋である。」

（『歴史其儘と歴史離れ』1915、森鷗外）

## ■ 柳田国男（やなぎたくにお、1875-1962）

『山莊太夫考』（1915）

柳田は鷗外の小説が出されるとすぐ「山莊太夫考」を発表した。柳田は「この春（大正4年）の『中央公論』に森鷗外氏の書かれた山莊太夫の物語は、例のごとくもっとも活々とした昔話であつた。」と鷗外の小説がきっかけとなって書き始めたことがわかる。そして、山莊太夫の「山莊」という名前の由来を考えるのであるが、陰陽師を「サンシヨ」と呼んだ例を挙げ、「サン」とは「算」であり、占

いの意味だとする。そして、この長者の話語り広めた者の通称が「サンシヨ」（算所・散所・産所）であり、物語の名前そのものに転化していったと考えた。柳田の分析は、「サンシヨ」と被差別部落民、散所法師、そして芸能民との関わりに及んだ点に大きな意義がある。



## ■ 薄田泣菫（すすきだきゅうきん、1877-1945）

おもひで（『二十五弦』、1905）

春の夜はしづかに更（ふ）けぬ  
はゆま路（ぢ）の並木のけぶり、  
箱馬車は轍（わだち）をどりて、  
宮津（みやづ）より由良（ゆら）へ急ぎぬ。

その後（のち）やいく春経（へ）けむ、  
おほ方は夢にうつゝに、  
忍びてはえこそ忘れぬ、  
由良の夜の追いわけ上手（じょうず）。

## ■ 長塚 節（ながつかたかし、1879-1915）

短歌『由良川』

由良川の 霧飛ぶ岸の 草むらに 嫁菜が花は あざやかに見ゆ

19歳の時に正岡子規の写生説に共感、21歳で子規を直接訪ね、入門、『アララギ』の創刊に携わった。もっぱら万葉の短歌の研究と作歌にはげんだが、子規の没後もその写生主義を継承した作風を発展させた。また散文の製作もてがけ、写生文を筆頭に数々の小説を『ホトトギス』に掲載。また、長編「土」を『東京朝日新聞』に連載、その代表作となった。農民小説のさきがけの一人として知られ、当時の農村の写実的描写が見事である。



カントウヨメナ

## ■ 三島由紀夫（みしまゆきお、1925-1970）

『金閣寺』（1956）

「第八章・・・宮津線の丹後由良駅の前へ出た。・・・私は海水浴御旅館由良館という看板のある駅前小さな宿に泊まろうと思つた。・・・あるかなきかに目の細い女が私を見ていた。私は宿を頼んだ。・・・金閣を私が焼けば、それは純粋な破壊、とりかえしのつかない破壊であり、人間の作った美の総量の目方を確実に減らすことになるのである。・・・『金閣を焼けば』と独言した。」



（京都府立大学 三橋研究室 20060803）